The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	がんの外科医者がたどった脳腫瘍手術後七年の足跡
Author(s)	藤田, 昌英
Citation	癌と人. 2014, 41, p. 29-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/36356
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

がんの外科医者がたどった脳腫瘍手術後七年の足跡

藤田　　昌英*

開頭手術

平成十八年の初夏、私は未だ自分の脳に大きな腫瘍ができている事など夢想だにせず、和歌山の小病院で日々の診療に明け暮れていました。全く無意識下に私の脳の働きが徐々に低下してゆくのを心配して、検査を受けるようにと指摘してくれたのは息子だけでした。六月半ば、夕診の合間に頭のCT写真を撮ってもらったのは、阪大微研病院外科に入局以来、長年にわたり苦楽を共にしてきた中野先生の薦めに従ったものです。何とCT写真には右の前頭部に六センチに近い大きな腫瘍ができ、脳室を圧迫するまでになっていました。

翌日の午後、当座の荷物だけ車に詰め込み、信頼する放射線科医浜田先生の下へと何とか無事にひた走りました。無言でフィルムを睨みつけていた先生は、『これは先生のじゃあないですか！』と絶句され、『車で来られた！よく無事にここまで来られましたね。まさにギネスものですよ』と呟きながら早速、内田クリニックに電話しMRI検査を予約されました。翌日、画像（写真　次頁右）を見ながら内田先生は『この腫瘍は輪郭のはっきり読めるものですが、脳圧の亢進がかなり進んでいますね。早く阪大病院脳外科を受診して貰いましょう。画像は届けておきます。次週の教授診察を受けてください』と言われ、息子の方に向きなおり『ご家族の協力が大切です。大変でしょうが、ご協力をお願いしますね』と締めくくられた。このように命のリレーは適確に行われました。いざとなれば決して慌てない息子の協力ぶりがわかり、とても嬉しかった。

教授診察の日は何の準備をする暇もなくやってきた。届けられていた画像に釘づけになっておられた先生は、今後の検査、治療の概略を説明された後、主治医となる橋本先生を紹介してくださった。別室に入ると先生から具体的なスケジュールが説明され、『今日からこの薬を飲んで下さい』と、抗痙攣薬アレビアチンと書かれた処方箋を示された。実は前日まで見てきた多くの重症の脳梗塞後の患者さんの姿が脳裏をよぎり、『絶対に飲まないといけませんか？』の質問が口をついて出てしまったが、『はい、手術までに痙攣が起こるのを防ぐためですから・・・』と、いとも事務的に告げられた。あっという間に事は進んで行ったが、心は妙に落ちついてきて、『やれやれ、これで俎板の鯉だ。じたばたするまい』と心の中で呟いていた。

月末には入院の手はずとなり、家内の運転で入院窓口へ、手続きは息子が済ましてくれた。詰所に上り、病室へ案内されると、看護師長さん、受持ち看護師の中田さんから次々とガイダンスが続いたが、朝からの緊張のせいか睡魔が襲ってきて、『フジタさーん』と何と八回も呼ばせてしまい断りの連続だった。

翌日から検査が連続してあり、仕上げには腫瘍塞栓術が手術時の出血を減らすために施行されたが、その医師の名も記憶の外にあった。阪本胃腸・外科クリニックからは院長自らお守りを持って来て下さったり、多くのスタッフが次々来訪され、とても元気づけられました。

痙攣発作を見ることもなく無事、七月五日の手術日にこぎつけた。手術台に横たわり、点滴が挿されたところから意識はなくなり、目が覚めたのは翌日回復室のベッドの上だった。術後、昼間は何となく過ごせたが、夜間には夢見がとても悪くて深夜に巡回してくれた看護師さんには大変ご迷惑をお掛けした。術後の輸血が必要

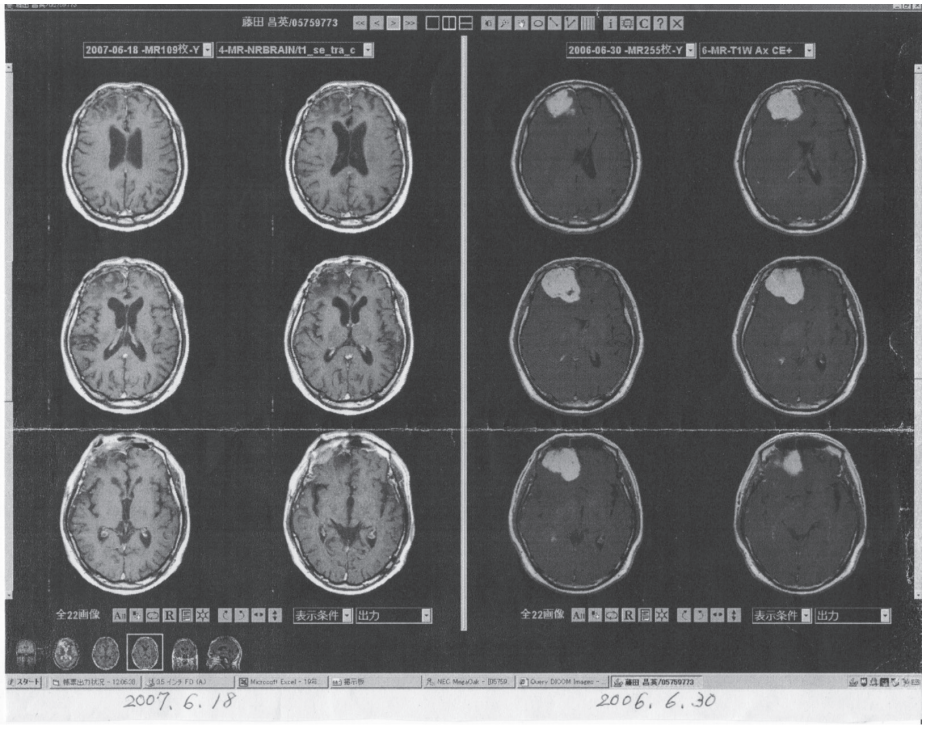
＊公益財団法人大阪癌研究会監事

だと申し送られたのも看護師さんで、長らく医療に携わっていながら看護師さんの大切な働きぶりを身近に知ることができたのは、大病をして臥せったお陰だと実感させられ真実感謝している。

術後はほぼ順調に経過したが、優しかった看護師さんは変身して『どんどん歩きましょう。食事も取りに行きましょう』と、愛の鞭に変わっていました。しかし、すっかり涙もろくなり「涙は脳の栄養になる」と励まされたり、息子が麻酔医に宛てたお願いメモに気づいて感涙にむせびました。私が心開かれたのも、昼下がりに部屋の清掃に来られた白髪交じりの男性から、信じる心を持つことの大切さを諭され、職業に貴賤はないことを悟った時でした。

術後１０日を過ぎ、少し落ち着いてきた頃、長女の一家が見舞いに来てくれ心が和んでいる時、主人からさしだされたのは脳トレの本でした。早く脳トレを始めたらと、息子からも川島先生の本を貰っていましたが、５歳と３歳の孫娘が早速パソコンドリルを始めました。恥ずかしながら、私がビリの不甲斐なさを味わいました。それから私は脳のリハビリ特訓として、川島先生の「脳力」日記帳に書き込むのが毎日の日課になりました。初日の記載に「左の手足の脱力が消えて、術後はじめてリハビリとして食事が運べた。皆さんへの感謝、涙とまらず」とあります。見舞いに来てくれた人達もシャベリの洪水に驚ろかれた。「出る出る言葉、自分でもオドロキ。きっと、抑うつがとれたためか。ウレシ」と記載している。

７月１８日には、待望の中間報告を息子とともに聞かせてもらった。血液検査、画像の説明に続き、「腫瘍は良性の髄膜腫で、ほぼ取れています」の説明に、私が「経過は、エクセレントですか」と問うと「はい、エクセレントです」の最高の返答が返ってきて、嬉しさにあふれくる涙を抑えきれなかった。７月２７日、いよいよ退院の日が来て身の回りを整理中に、先生や看護師さんが次々来られたが、「息子さんもホッとした、とっても良い顔をしておられましたよ」に、こらえ切れず涙ぐんでしまった。事実、この１ヶ月間の息子の献身的な働きぶりには、とても感謝している。



無事に自宅に帰りついて、毎月の定期受診のみとなり、それまでの仕事一辺倒で生きてきた過去をしみじみと振り返る時間のゆとりができた。しかし、ホッとする間もなく、色々とするべきことが沸いてきた。すっかり夜型に狂ってしまった時間軸を戻すこと、お礼の挨拶回りをすること、和歌山の下宿から引き上げられてきている段ボール箱に詰められた調度品や、天井裏の収納庫に積み上げられた書籍類の整理など、際限がない。

脳外科受診時には、毎回主な出来事をレポートにまとめ持参した。３ヵ月後の文には「・・・お陰さまで徐々にですが日常生活には進歩が見られ、周囲に大きな迷惑をかけずに過ごせるまでになっております？医者が病気になった時は扱いが難しいといわれます。まさに私にぴったり当てはまるのでは、と自覚する時があります。そんな時、親友の一人から頂いた〔あせるな、あせるなよ！〕の忠言を思い出すと、不思議に気分がおちついてくる事があります。大変扱いにくい患者ですが、何とぞよろしくお願い申し上げます」こんな毎回持参するレポートが、私の脳の働きの回復度を示すデーターとして残っている。

しかし、社会復帰までの道のりは平坦ではなく、三つの課題があり、年始めに臨時受診した。一つめの診療への復帰については、軽い再診患者への対応はOKが出ました。二つめの車の運転再開については、「そろそろ添乗があれば始めても良いでしょう」と言われたが、息子からの忠言を聞き、三人の友人に添乗してもらい何とかOKが出ました。三つめは精神神経科の見立て「この前頭葉障害は徐々に正常化する可能性はあるが、それまでは高次判断を要する仕事は避けるように」について、セカンドオピニオンを求める件は、「はい、どうぞ」と肯定されました。早速、京都大学病院の精神科を受診したが、問診の内容と送られてきていた診療記録から「いずれ右前頭葉機能障害は軽快してゆくと思います」と話され、ホッと胸を撫で下ろした。阪大精神科の友人にもその事を話したが、「私も、その先生の意見に賛成です」と言われ、すっかり気分を良くした。

能力日記帳への記入は、しばらく続いていたが、荷物の整理が忙しくなると昼間の疲れも相当なものになり、夜型人間はいつの間にか朝型人間に移っていった。こんなある早朝、三時過ぎから流れるNHKラジオ深夜便に、すっかり虜になってしまった。懐かしい歌の数々に続いて、四時台の色んな人が半生を語る「こころの時代」を聞き、テープに録音しながらメモを取り、こころ豊かに朝を迎えるのが習慣になりました。このラジオ深夜便は、現役から遠ざかった私にとって究極の脳トレになりました。夜型時代には、いやな夢にうなされ一睡もできぬまま夜明けを迎える日々が続いたが、朝型に移って清々しい朝を迎えると、すっかり忘れていた花鳥風月を愛でる心も戻ってきて、庭の草花の手入れや畑を借り野菜を作るゆとりも出てきました。

その頃になって、私の受けた治療から回復までの手記を纏めねばと思いつき、そのふさわしいタイトルは入院中に三人の看護師さんから指摘された〔すばらしい夜明け〕にしようと心に決めました。

術後一年が経ち、６回目のMRI検査の画像結果を聞く日がやってきた。画像と睨めっこしている橋本先生の顔には、自信がにじみ出ていて、こちらも思わず釘づけに・・・。一年前のものと並べられた今回の画像は、巨大な腫瘍は消え一見正常に見えます。やおら向きなおった先生から「良かったですね」と呟かれると「はい・・・有難うございました」と自然に涙があふれてきて、今回も思わず「エクセレントでしょうか？」と口をついて出ました。「結果は文句なくエクセレントです。納得されました？」と握手を求めてこられました。一年間耐えて待った最高の日となりました。帰りがけに「この画像のコピーを阪本先生に見せて、コメントを貰ってください」と頂きました。（写真　前頁左）

思い返せば、この一年間、家族と多くの知人友人、そして多くの先生方、看護師さんをはじ

めとするチーム医療によって救われ、再びこの世に蘇ることができました。私は及ばずながら「土に生かされ、こころに生きることを悟り、この世に生きさせてくれた方々に少しでも恩返しができれば」と、この闘病記を書きました。

すばらしい夜明けの会の発足

１年間にわたる、この貴重な闘病の記録は『すばらしい夜明け』のタイトルで１冊の本にまとめましたが、術後の回復期に痛感した事は「病める患者さんには身体ばかりでなく、精神的な苦痛に対しても十分にサポートをしなければならない」と思い知らされた事でした。

私は医師になってから３５年間、阪大微研病院さらに井上病院で、がん中心の診療を続けました。その間に治療した胃がん、大腸がん、乳がんなどの患者さんは二千人を超えていると思われます。久しぶりに阪本クリニックの診療に復帰すると、馴染みの患者さんから労われ、私は闘病のあらましを語るのが常でした。多くの患者さんから「先生、私もかっては悩み、苦しみつつ今日を迎えています。それを書いたら見てくれますか？」との会話がありました。そこで、外来に来られている方ばかりでなく、ご健存と思われる方々にも当時の闘病の記録を書いて下さるように、とお願いの文をしたためました。嬉しいことに四十編を超す寄稿文が集まり、『がんとの闘い－胃・大腸・乳がんの患者と支える人々の思い－』のタイトルで一冊の本にまとめることができました。

この二冊の闘病記の出版を期して、平成１９年末に多くの執筆者と関係者にお披露目の会を催しました。しかし、その準備をする間に、今後益々増加するであろう“がん”患者さんの「心のケア」を行う市民団体を立ち上げ、定期的な活動をしよう、という計画を思いつきました。出版記念会の当日、その計画は承認され、『すばらしい夜明けの会』が発足しました。

本会は当初、世話人七名と、がんの闘病記に投稿された方々を会員として発足しました。平成２０年３月から、会の定期的な活動として、がんの悩みの相談会『お役に立てれば』を毎月１回、火曜日の午後２時から、みのお市民活動センターの会議室で定期開催しています。参加の対象は、色々ながんと診断されて治療中の方とご家族とし、今悩んでおられる事をお聞きして、ご希望の内容について話し合いをさせていただいています。お知らせのチラシは北摂一円の病院や調剤薬局と公民館に配布しており、その裏面には私たちの闘病の記録書２冊を参考図書として紹介し、さらに多くの闘病記ほかの参考図書のリストを並べており、希望者にはお貸ししています。

相談会への来会者は毎回５名から８名ですが、年を追うごとに徐々にですが増加してきており、５年間で延べ３００名を超えています。来会者を疾患別に見ると、肺がんと乳がんが多く、女性の比率が高くなっています。初回の来会者には、会の終了時に満足度の記入をお願いしていますが、ほとんどの方から高い評価を頂いています。本会の特徴は再来者の多いことが挙げられますが、二年を超えて連続来会中の方の言「じっくり気さくに話ができ、気持ちがとても楽になった。会に毎月来るのが楽しみです」を挙げておきます。また、対面して悩みをお聞きするだけでなく、多くのリピーターの方々が加わり、いわゆる“ピア・カウンセリング”が実践されていることです。さらに特筆すべきは、がん患者としての自らの経験と豊富な薬剤知識を生かして適切な情報提供をしてくださる加藤世話人の働きにより、来会者の満足度が一段と向上していることです。

箕面市からは、大切な社会的な課題に取り組む事業として、その必要性が認められ、三年間にわたってNPO助成金を頂きました。箕面市立病院の院長先生を訪ねた際には「当院でも患者さんの悩みには相談に応じています。しかし、がんに特化したこの催しは病院の機能を補完する重要な市民へのサービスであり、大いに感謝しています」と高い評価をいただきました。また、市立豊中病院の院長先生にお会いした際には「当院は北摂地区のがん相談支援センターを

担当しているが、がん専門の医師が自ら行うこの催しは貴重であり、利用者を紹介しましょう」と快諾していただきました。

本会の延べ会員数は六十二名ですが、毎年３～４回会報を発行し、会員総会を年一回開いて会員相互の情報交換を図っています。さらに、これまでに内外の講師にお願いして、講演会を５回開催して会の充実を図っていますが、いずれも大変好評を博しています。

東日本大震災の医療支援に参加

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、東北地方を襲った未曽有の大災害に、私にも何か出来る事は無いかと思いめぐらせました。丁度、大阪府医師会が災害医療支援に乗り出し、チームを編成して岩手県の被災地へ援助の手をさし伸べているのを知り、私も早速に申し出ました。“１７年前に起こった阪神淡路大震災の折、神戸の実家は全壊しましたが、息子は長田へボランティアに駆けつけたのを思い出し、私も何か役立つ仕事をしたい”旨の応援メッセージを３月１６日にＮＨＫ朝一番に送ったところ、翌日に放送されました。

３月２２日、医師会から送られてきた募集要項を見ますと、「チーム編成をして、被災地へは自己完結型（ヘルメット、マスク、寝袋、食糧、白衣、聴診器など）でお願いします。」と書かれていました。

実際には、私の申し込んだ阪本胃腸・外科クリニックのチームには看護師がいなかったため、他の完全なチームに合流して、５月の連休中に勤務する予定となりました。実際には遅くなった事が幸いして、また合流する清恵会チームの意向を反映して、臨時便の飛行機で岩手花巻空港に夜に着き、宿泊基地になっている遠野盆地の民宿に深夜に着きました。翌日、早暁にジャンボタクシーで出発しましたが、車が山道にかかると、見事なヤマザクラの景色と、広葉樹の森の中を走りました。所々に雪の残る峠を越えると、のどかな山村の景色になりましたが、やがて次の句のような現実が待っていました。

「峠下り　桜もえぎ芽　次ガレキ」　大槌町の市街地は、目を覆いたくなるような瓦礫の山と車の残骸で埋め尽くされている惨状に思わず涙しました。（写真　下）

やっと避難所に着いたのは８時過ぎで、すでに現地の植田先生が一人で患者さんに向かっておられました。お聞きすると、先生も被災されましたがヘリコプターで救出され、翌日からここで被災者と共に寝袋で夜を過ごし、昼間はこのように診療に当たっているとの事でした。

白髪交じりの先生の横顔を拝見していると、“これこそ医療の原点だ”と思い、自然に次に句「強くあり　心穏やか　大槌の被災した先生に　後光ぞ射す」が私の脳裏をよぎりました。先生からのガイダンスと前チームからの伝達事項を確認するミーティングを終え、我々も診察に加わりました。急性期の患者さんは既に減っていて、高血圧症や慢性腰痛などの方が殆

んどでしたが、中にはお礼の一言「ありがとう。先生は大阪から来なすった、と？」と言われると、“はるばるやって来て本当に良かった”と最大の元気を頂きました。（写真　前頁下）

連休中とあって、午後は来られる患者さんはまばらになりました。避難所の入り口横には、数え切れないほどの“尋ね人のビラ”が張り出されていて、思わず釘づけになり胸を締め付けられましたが、避難者の方はそこを素通りする姿を見ていると、時間の経過を思い知らされました。避難所の午後は閑散としていましたが、多くの方は自宅の後片付けに行かれ、お年寄りだけが残っている姿を目の当たりにしました。この時間帯を利用して避難所内の消毒スプレーをし、釜石保健所から来られた保健師さんとの打ち合わせをしましたが、何と彼女らも横浜から来た応援の人だとわかりました。神奈川から来た理容師さんが臨時に店開きすると、長い待ち人の列が出来ているのを見ましたし、お天気に恵まれ屋外のテントでは、神戸から来た足湯サービス隊が活躍していました。

毎日の診療内容を報告するミーティングが釜石の災害対策本部であり、私も第２日の夕方に行きましたが、釜石市街地の惨状も目を覆うばかりでした。

土曜の午後に、植田先生から「折角来られたのだから、町の様子を案内しましょう」の言葉に甘え、出かけました。

道路だけは開かれていますが、木造の住宅は土台だけを残して瓦礫が乗っており、鉄筋の建物は津波がさらって行った１，２階は吹き抜けで上部だけがかろうじて立っている有様を間じかに見、港へ向かうと防潮堤は引き裂かれ転がっていたり、ボロボロに壊れた桟橋がありましたが、先生は「これでも、随分きれいになったなー」と仰られ、いまさらながら津波のすさまじさを実感させられました。しかし、自衛隊の重機だけは、うなりをあげて瓦礫を撤去する作業を黙々としており、私の自衛隊に対する印象は払拭されました。

帰宅して落ちついた時に、しみじみ感じた事は「本当に恐ろしいのは地震より津波であること。生存した現地の被災者の方々の表情が意外に明るかったこと。盗みも暴動も起こさず互いに助け合っていた日本人の節度」でした。

これをご縁に先生とは季節ごとに連絡をしています。帰阪後お礼状をしたためましたが、６月初めに２通の手紙を頂きました。一通は「東日本大震災と私」のタイトルをつけた文章で、「津波が町を襲い命からがら自院の屋上まで駆け上がった時に見た“まさに忽然と海中に立っている私たち。瓦礫や家が沖へ流れていく光景は悪夢のようであった”」という当時の街の写真数葉が同封されていました。もう一通は、「あの日から３ヶ月が経った６月１１日の午後、地震発生時に合せ、サイレンが鳴り読経が流れ、皆手を合わせて祈りました。更地化した町は、まるで廃墟のようです。私には全く変わってしまった日常。自然への畏怖を忘れず、自然体で対峙していきたい」と結ばれていました。

平成２３年１０月１５日、大阪府医師会の公開シンポジウム「震災と地域医療－被災地から学ぶ」が開かれて、先生は現地を代表して話されました。“被災後の今”の項で「４ヶ月が過ぎた日曜日に日頃トレーニングに登っている小鯨山に行きましたが、２度も休み登った尾根から見下ろした町は、まるで白い砂漠のように見え、改めて巨大津波の恐ろしさに驚愕しました。７月に開いた仮設診療所には“開ぐの待ってたよ”と患者さんが来られ嬉しく思います」と締めくくられました。翌２４年１月には賀状に代えて「昨秋より仮設診療所での診療が始まっています。人々は多くの家族、友人を失いました。しかし、誇らしく感じるのは大槌の町の皆が、お互いに気遣って暮らし声を掛け合い、微笑みながら生活していることです。大槌人の心意気を確信できました。何時の日か新たなる大槌での再開を願っています」を頂きました。

震災から１年目にお送りした便りの返信には「また激しい余震がありましたが、混乱はなく“あの時に情報、迅速な避難、より高い避難所の一つでもあったならば・・・・”と悔やまれ

ます。現実には多くの人命が失われ、土台だけが広がる町では復旧、復興は遅々として進んでいません」と書かれていました。

２回目の３・１１を終えた日「少しホッとしています。そして町も静かになっています。しかし、遅々として復旧が進まぬ中、私は新医院を計画し頑張っております」のお便りを頂き、こちらも胸を撫で下ろしました。また、「気の遠くなるほど先になるかもしれませんが、復興なった暁には岩手の豊富な海の幸をご馳走しましょう」との便りを頂き、その日が一日も早く訪れることを祈っていました。

図らずも平成２５年の晩秋に、その機会は巡ってきました。みちのくの浄土中尊寺を訪ねる旅（後記）の機会に再訪しようと思いたち、未だ鉄道も不通なのを承知で植田先生にお伺いをたてたところ、折り返し「その日は時間が取れるので、駅（釜石）まで迎えに行きましょう」の返信を頂きました。お言葉に甘え、１１月７日に先生の車で大槌町を案内して頂きましたが、街はすっかり平地に変わり果てていました。しかし、懐かしい避難所跡のすぐ横に建つ木の香りがする先生の診療所を訪ね、ホッと救われる思いがしました。夜は漁火がまたたく大槌湾の高みにあるお店で新鮮な鮑づくしのご馳走をいただき、念願を果たしました。

終わりに

最近の私の暮らしぶりを少し紹介させていただきます。お陰さまですっかり健康をとり戻しましたが、診療は月曜日のみとなったこともあり、残されたゆとりの時間を有意義に過ごしています。

一昨年には喜寿を迎え、多くの友人・知人から心のこもった祝いの会をしていただきましたが、嬉しさと共に一抹の寂しさを覚えました。

脳腫瘍の術後六年目にあたる平成二十四年春まで毎年、脳外科を受診して頭の MRI 検査を受けていましたが、先生から「この検査は、もう良いことにしましょう」と太鼓判をいただき、この病から開放された喜びをかみしめました。

ボランテイア活動も、「すばらしい夜明けの会」の他に、日本最大の実践自然保護団体「日本熊森協会」にも参加して、北大阪地区の長を２年間つとめ、充実した日々を過ごしています。ある日の早朝、NHK 深夜便「こころの時代」に出演された高僧が「達磨大師は禅画の中で“子孫にお金を残しても彼らは使ってしまいますよ。そんな事をするより、人の知らない所で徳を積みなさい”と言われました」これは今の私の心境でもあります。

お陰さまで、健康と時間には恵まれ、充実した旅もしています。世界自然遺産への旅では、まず島根の石見銀山遺跡を訪ねました。次に、鹿児島県のはるか南にある屋久島の縄文杉へのトレッキングに挑戦し、悠久の時を超えてそそり立つ神々しい姿に感動しました。さらに秋田、青森の県境に広がる白神山地のウォーキングでは、すばらしいブナの原生林の森に圧倒されました。いずれも思い出深い旅でした。

NHK 学園では色々なスクーリングの旅を企画されています。国内の旅では毎年、各地の寺院を巡る納経・納佛の旅がありますが、これまでに５回参加しました。昨年は世界文化遺産に登録された平泉の「みちのくの仏国土」中尊寺、毛越寺ほかを訪ね、心洗われるとてもよい旅でした。

海外への旅では、中国の西域、河西回廊から新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠に点在する莫高窟、高昌故城、キジル千佛洞ほか多くの仏教遺跡を訪ねる雄大な旅が四年続けてあり、全てに参加しました。東方学の権威である同行講師、堀内先生から毎回、現地で前日に訪ねた遺跡を基にした生きた講義をお聞きし、仏教の奥深さに触れることができました。加えて学園から修了証書第一号を頂きましたが，何よりの収穫は、旅を通じて親しい友人ができた事でした。